意図的検索の阻害により生じる無意図的想起に関する検討

○雨宮有里¹・高史明²

(¹東京女学館大学国際教養学部・²神奈川大学)

キーワード：無意図的想起，検索過程，自伝的記憶

Examination to Involuntary memories which arises by prevention of Voluntary retrieval

Yuri AMEMIYA¹ and Fumiaki TAKA²

(¹Tokyo Jogakkan Colleg., ²Kanagawa University)

Key Words: Involuntary Memory, Retrieval Process, Autobiographical Memory

目 的

過去の出来事を思い出そうとして想起することを意図的想起、出来事がふと意識に上ることを無意図的想起という。この2つは異なる検索過程が仮定されている (Berntsen & Hall, 2004) が、意図的想起を求めると、それを行おうとしていたにも関わらず、出来事を無意図的に想起する参加者が一定数存在する。この現象はどのように説明が可能だろうか。

この現象について、本研究では『意図的な検索が阻害されると無意図的想起が生じやすくなる』という仮説を立て検討した。雨宮ら (2011) のモデルでは、刺激の呈示をうけ、まず記憶表象が活性化するとしている。そして、この活性化が十分な場合は、記憶表象が意識に上り無意図的想起が生起する。一方、意図的想起では目的に合致する記憶表象にたどり着くまで意図的な検索が行われる。しかしながら、この検索は認知資源を必要とするため、十分な認知資源がない時は、目的とする記憶表象にたどり着く前に検索が終了する。この場合、初めの記憶表象の活性化が十分な場合は、出来事が無意図に想起が生起されたと認識する。このモデルから、意図的想起を行おうとしたにも関わらず無意図的想起が生じた参加者は、意図的な検索は途中で終了したが、初めに活性化された記憶表象が意識に上り無意図的想起が生じたと考えられる。

この説明が妥当かを検討するため、本研究では記憶表象を十分に活性化した上で認知的負荷を課し、意図的な検索を阻害した。より具体的には、自伝的記憶の想起手がかりとして有効性が確認されている単語を想起手がかりとして意図的想起を行わせ、同時に二重課題として単語親密性評価を求めた。仮に『意図的な検索が阻害されると無意図的想起が生じやすくなる』のであれば、意図的想起を試みたにも関わらず出来事を無意図的に想起する参加者が増える予想される。

さらに、本研究では意図的想起を試みたにも関わらず無意図的に想起された出来事と、意図的に想起された出来事の性質を調べるために、出来事の特定性を比較した。雨宮らの一連の研究では、単語を想起手がかりとした場合は、意図的想起のほうが無意図的想起よりも特定性の高い出来事を思い出すという結果が得られている。そのため、もし意図的想起を試みたにも関わらず無意図的に想起された出来事と、従来の無意図的想起が類似の性質であれば、先行研究と同じく、無意図的に想起された出来事よりも意図的に想起された出来事のほうが、特定性が高くなると予想される。

さらに、本研究では意図的想起を試みたにも関わらず出来事を無意図的に想起した参加者と意図的に想起した参加者の日常記憶の違いについて調べるために日常記憶質問紙 (清水・高橋・齋藤, 2007) を行い、両者の記憶経験を比較した。

方 法

【実験参加者】185名 (男性82, 女性102, 記載なし1)。

【手続き】実験は質問紙を用いて集団で行われた。参加者は教示 (言葉をどのくらい見たり聞いたり使ったりするかを評価しながら、その言葉に関連するあなたが過去に経験した出

来事を思い出してください) により、出来事の想起を行いながら二重課題として単語親密性評価を行った。その後、出来事の想起の有無と特定性評価、想起意図の有無 (出来事は思い出そうとして思い出した・自然と思いだされた) を回答した。なお、日常記憶質問紙はすべての参加者が回答した。

結果 と 考察

【想起率】回答を途中放棄した7名と想起意図の回答がなかった3名のデータは分析対象としなかった。本研究では「出来事を思い出そうとして思い出した」と回答したデータを意図的想起、「自然と思いだされた」と回答したデータを無意図的想起とした。表1に、本研究と同じ想起手がかりを用いた通常の意図的想起を求めた雨宮ら (2012) と本研究の結果を示す。雨宮ら (2012) と比較すると、本研究では出来事を無意図的に想起した割合が多かった。この結果は、意図的な検索が阻害されると無意図的想起が生じやすくなるという仮説を支持するものであるといえる。

表1. 条件ごとの人数と%

	認知的負荷・意図的想起課題 (本研究)	通常の意図的想起課題 (雨宮ら 2012)
想起なし	35 (20%)	0 (0%)
意図的想起	41 (23.4%)	57 (72.2%)
無意図的想起	99 (56.6%)	22 (27.8%)

【特定性】意図的想起を試みたにも関わらず無意図的に想起された出来事の特定性の中央値は2 (0~3, 値が大きいほど特定性の高い詳細な出来事を想起)、意図的に想起された出来事の中央値は3であり、1%水準で有意差が見られた。即ち、意図的想起を試みたにも関わらず無意図的に想起された出来事は意図的想起された出来事より特定性が低く、従来の無意図的想起と類似の性質を持つことが示唆された。

【日常記憶質問紙】出来事を意図的に想起した参加者と無意図的に想起した参加者とで尺度得点の平均値に差があるか比較した。その結果、「頭から離れない記憶・無意図的想起」因子でのみ有意な差が見られ、意図的想起を試みたにも関わらず出来事を無意図的に想起した参加者の得点の平均値 (3.06) のほうが、出来事を意図的に想起した参加者の得点の平均値 (2.83) よりも高かった。即ち、意図的想起を試みたにも関わらず出来事を無意図的に想起した参加者は、出来事を意図的に想起した参加者に比べて日常的に無意図的想起が多く、頭からはなれられない記憶を経験したり、小説やドラマの説がよく頭に浮かんだりすると報告した。なお、「記憶能力：検索、活動の記憶、課題や会話モニタリング」や「うっかり・ぼんやりの失敗、検索の失敗」は有意な差は見られなかった。この結果は、無意図的想起を経験しやすい人は、記憶のアクセス能力が高い可能性を示唆するものである。